070319

令和６年度　愛媛県立西条高等学校（全日制）　第三学期終業式式辞

皆さん、おはようございます。今日で令和６年度が終わります。今年度は、皆さんにとって納得のいく１年だったでしょうか。

今日は、校長の私から皆さんに「学ぶということ」そして「想像する力」についてお話をしたいと思います。

私は物理担当教員として、長い間、受験指導に関わってきました。その経験から言いますと、受験を前にした３年生はすごい力を持っていて、私が新しい知識や情報を伝えるやいなや、それをまるで乾いたスポンジが水を吸うように即座に吸収することができるのです。彼らを見ていると、必要な知識や情報を頭に入れるたびに、それらが融合して頭の中の容器そのものがどんどん大きくなり、それぞれの人に応じた独自の形に変化していくように感じていました。こうして、たくさんの知識を吸収することで「学び」を深めた受験生たちは、全くの「別人」に変わっていくのです。ここでいう「別人」とは、「学ぶ」ことにより、受験生の表情が変わり、声が変わり、行動が変わり、語彙力が増え、質問の質が変わり、問題に対する解答の質が向上していくことを意味します。まるで、アオムシがチョウへと変化するかのように、劇的に成長していく受験生の姿に、私は毎年驚きを隠せませんでした。本当に充実した「学び」ができた時、人は「別人」になるのだと思います。４月から受験生になる２年生の皆さんが、「学び」を通じて「別人」へと変化してくれることを、私はとても楽しみにしています。

次に、「想像する力」について話したいと思います。ある新聞に、昨年の１月、能登半島地震で被災した高校生の記事が載っていました。彼女は地震発生から３時間後に救出され、避難所でコップ１杯の水を家族５人で分け合って夜を過ごし、翌日に被災者が持ち寄った材料で作った料理を食べてようやく、不安や恐怖から解放されたといいます。その体験から、彼女は「食事は生きる力になる」と痛感したそうです。そして、高校の食品化学コースで学ぶ彼女は自宅に戻ってから、被災地の非常食について考え始め、部活動の仲間とともに甘酒を使った羊羹を開発したというのです。更に、現在はその羊羹を被災地に配布して備蓄用の食料にしてもらうためにクラウドファンディングで資金を集めています。記事には完成した羊羹を手に持って微笑む写真が掲載されていました。被災体験の後、自分の知識や技能を使って人の役に立とうとする高校生の姿に、私は感動したのです。私たちは、災害のニュースを見て、「大変だ」「かわいそうだ」「辛いだろう」と思ったとしても、実感が湧かず、どこか他人事のように感じてしまいがちです。そういう時に、必要なのが「想像する力」だと私は思います。コップ１杯の水を家族５人で分け合って飲む気持ち。きっと、大人たちは我慢して、子どもに先に水を飲ませてあげたに違いありません。子どもたちもきっと家族に遠慮して飲んでいたことでしょう。想像してください。能登の冬の夜に避難所で過ごす寒さと心細さを。夜が明けても避難物資がすぐに届くわけでもなく、「生きる」ことを真剣に考えなければならない状況を。そんな中、皆さんと同じ高校生が被災したふるさとのために頑張っていたのです。こんな時、西条高校の生徒の皆さんなら何ができるでしょうか。この話を聞いて何を思ったでしょうか。小さな記事からいろいろなことが想像できると思うのです。

今日話した「学ぶということ」、そして「想像する力」を身に付けることは、これから大人へと成長していく皆さんにとって、重要なことだと私は思っています。４月からの皆さんの活躍と頑張りを大いに期待して式辞とします。